

2012年度 学術交流支援資金報告書「海外の大学等との共同学術活動支援」

研究課題名：トランスカルチャー論プロジェクト

研究代表者氏名：藁谷郁美

所属／職名：政策・メディア研究科／准教授

研究課題：ドイツ州立ハレ・ヴィッテンベルク大学との共同授業および共同研究活動の確立
－ 政策・メディア研究科におけるダブル・ディグリー・マスターコース学生受け入れ体制の確立と運用 (2) －

1. 本研究の背景と目的

2009年度、政策・メディア研究科が文学研究科と共同で、ドイツ州立ハレ大学大学院とダブルディグリープログラム（修士号）を締結し、今年度（2012年度）の春学期、1名の学生が両者のディグリーを同時取得（第1期生）、2012年度秋学期に更に1名がダブルディグリーを同時取得した（現在の時点で、ドイツとのダブルディグリー制度をもつ大学は慶應義塾大学のみであり、この数年、これを理由に他大学から政策・メディア研究科を受験しようとする例がみられる）。本ダブルディグリープログラムの枠内で、すでにハレ大学側からの卒業生は2011年度に輩出されている。

しかし慶應義塾で受け入れ機関となっているのはもっぱら文学研究科の日本語・日本文化教育センター（通称：日・日センター）である。つまり、現行の制度では、政策・メディア研究科は学生を「派遣」するのみであり、「受け入れ」は文学研究科（日・日センター）が担っている。すでにハレ大学とSFCキャンパスの学生の交流は、教育および研究レベル両者でおこなわれており（以下に詳細を記す）、受け入れの下地はほぼ整っていると考えられる。実際にダブルディグリー学生を受け入れることで、SFCキャンパス内での学生同士の交流の場を構築することは望ましい。したがって、政策・メディア研究科に受け入れ態勢を準備し、本プログラムをSFC－ハレ大学が相互に学生を派遣・受け入れする形での、双方向性のあるプログラムへと展開することが、本研究の目的である。

2. 現在の状況・成果と問題点

上記に記した目的を踏まえて、2011年度より、これまでの両大学・大学院間でおこなわれている教育および研究交流を可視化する作業を開始した。現在の問題点は、1）受入学生に対するじゅうぶんな日本語学習環境の提供、および2）毎年持続的に派遣できる候補者の確保ならびに大学院プログラムとしての周知が必ずしも着実に機能していないところにある。しかしながら、(1)については、すでに日本研究プラットフォームが総合政策学部を中心に立ち上がっており、日本語関連授業科目数が増えるであろうことが予測されることから、本プログラムの環境改善につながると考える。なお2012年度より日本語セクシ

ョンでの専任教員の任用に伴い、2014年度以降の新カリキュラム体制では日本語インテンシブコースの開設が予定されている。(2)については、政策・メディア研究科の各プログラム内で周知すること、そして何よりも研究科委員の研究レベルでの一層の交流が必要となる。受け入れ人数の確保については、これまでの実績（一昨年度のダブルディグリー・プログラムでドイツ側4名の定員枠に対して、56名の応募があったこと）から問題はないと考える。

なお、具体的なこれまでの実績および今後の課題は以下の通りである：

2.1. 共同講義科目の運用とアーカイブシステムの必要性

2001年度春学期よりドイツ語圏の大学と共同で遠隔ビデオシステムを取り入れた授業スタイルの導入および授業形態の多様化を目指してきた。実際に授業として運用を開始したのは2002年度秋学期からである。同年より現在に至るまで、ドイツ州立ハレ大学およびドイツ州立ドレスデン工科大学東アジアセンターとの共同授業（タンデムプロジェクト）が継続されている。同時に2006年春学期より、ドイツ州立ハレ大学に日本学科との共同授業が開始され、現在まで継続されている。これまでの実績をもとに、遠隔会議システムが外国語学習環境のなかでいかなる意味を有し、どのような方向へと拡大していくのか、その可能性を具体化した形で提示することは、今後の開発方向を見極めるうえできわめて重要である。

2006年度以降、継続しておこなわれているハレ大学との共同授業「言語教育実践論」（ドイツ語講義科目：春学期担当者 マルクス・グラースマック非常勤講師／秋学期担当者 マルコ・ラインデル訪問講師）は、それぞれ1）双方の画面中の動画、2）双方のプレゼンテーション内容プロセス、および3）SFC側から見た共同ディスカッションの経過、について録画録音し、学期中はそれぞれの担当者および履修者がデータを再生できる環境を構築した。また、本プロジェクトの中心となっている「ドイツ語教材開発研究プロジェクト」の主な活動場所であるドイツ語研究室に遠隔会議システムを導入した。

上記と同様に2001年度よりドイツ州立ハレ・ヴィッテンベルク大学の日本学科と協力し、ドイツ語および日本語学習のためのグループワーク活動を実施している。運用はSFC内のインテンシブドイツ語初級3履修者を対象におこなっており、授業外の時間を使用してWebカメラおよびSkypeの併用でグループワークの形で課題に取り組むものである。しかしながら、2006年度時点で構築したシステムは、継続運用が困難となり、2009年度以降はまったくアーカイブシステムが機能していない。サーバ内の更新プログラムが不安定だったことが主な理由と考えられる。昨年度はこの問題に取り組むための準備をおこなったが、技術的な支援に問題があり、2012年度はSFCキャンパスITC協議委員会内でAVホールを遠隔授業に最適化した設備への提議も検討している。「継続性」を重視したシステム構築は、今後の重要な課題である。

日独間の大学交流を学習および研究レベルで今後展開していくためには、これまでのデータの評価と同時に、本アーカイブシステムの新たな構築および運用が必要となる。これまでの実績を評価するためには、録画資料を「データ」として位置づけ、これまでの蓄積データおよび今後発生するデータを「データベース」として構築することが必要であり、そのためのシステム構築および分析評価が本研究の目指す目標のひとつである。そのためを試みとして研究室で運用が困難であったデータ蓄積用サーバの内容をすべて ITC 領域へ移行する作業を完了した。

2.2. 研究レベルの交流への方向性とのその整備

上記と並行して、夏季休業期間および春季休業期間を使い、フィールドワーク活動を目的とした SFC ドイツ語履修者のハレへの派遣を実施している。逆に、同時期にはほぼ同数（毎年 5～6 名）のハレ大学日本語履修者を、フィールドワーク活動のため SFC に受け入れている。それぞれの準備は「タンデム」と呼んでいるグループワーク活動や共同講義科目を通してお互いに進めている。この結果は <http://deutsch.sfc.keio.ac.jp/> にデータとして蓄積され、現在の学習者が参照できる状態を維持している。なお、本活動については、これまで未来先導基金およびハニエル財団基金の援助を受け、奨学金の形で参加者を支援できた時期があり、今後の資金供出の可能性を探る必要がある。また、これまでに特別研究プロジェクトとして授業「まちづくりと交通機関」（古谷知之准教授、ズザンネ・エルファデーニング講師（当時））を現地で行っている。学部生および大学院生の交流活動のほかに、研究者の交流もおこなってきた。これまでにハレ大学での集中講義や講演（2007 年度および 2009 年度：藁谷郁美、2011 年度：大江守之教授、2012 年度：藁谷郁美）などを通して、研究者レベルでの交流もおこなっている（ハレ大学公式ホームページ参照：http://pressemittelungen.pr.uni-halle.de/index.php?modus=pmanzeige&pm_id=783）。また、ドイツ語関連科目については、ハレ大学からインターンシップを受け入れ、教授法の指導もおこなっている。2012 年度春期休業期間にはハレ大学の学部および大学院生を受け入れ、ハレ大学日本学研究所所長の Prof. Dr. Christian Oberländer 氏を迎え、本課題について話し合いの場を持った。なお、今年もハレ大学からの受け入れ学生と SFC ドイツ語履修者（学部生および大学院生）との共同フィールドワーク研究を遂行している。この点は SFC 公式ホームページにて報告（「日独学生交流 ドイツ州立ハレ大学留学生交流活動プログラム・学生交流のお知らせ」 <http://www.sfc.keio.ac.jp/news/20130301.html> 参照）。

これらの活動が実績の基礎となり、2008 年度にはドイツ州立ハレ・ヴィッテンベルク大学との間に交換協定を締結、さらに 2009 年度には政策メディア研究科との間にダブルディグリーマスタープログラムの締結が実現した。現在、既にこのプログラムを使い現地で研究活動をおこない修士学生（村田優子君）が 2012 年度春学期に修了、（米持愛未君）1 名

が2012年度秋学期をもってダブルディグリープログラムによる修士号取得を修了した。これまで両名にインタビューをした結果、現地大学に留学中の指導教員の決定作業に時間がかかりすぎることに、そして三田キャンパスに滞在するハレ大学からのダブルディグリー生との交流が時間的に難しいことが問題点として挙げられている。

3. 本研究の現状

2006年度以降、継続しておこなわれているハレ大学との共同授業「言語教育実践論」（ドイツ語講義科目：春学期担当者 マルクス・グラスミュック非常勤講師／秋学期担当者 マルコ・ラインデル訪問講師）は、共同ディスカッションの経過について録画録音し、学期中はそれぞれの担当者および履修者がデータを再生できる環境を構築した。今年度も引き続き日独共同講義科目「言語教育実践論」（ドイツ語講義科目：春学期担当者 マルクス・グラスミュック非常勤講師／秋学期担当者 マルコ・ラインデル訪問講師）を開講している。今後のアーカイブシステムを構築するためには、1) データ集積サーバの管理場所とその方法、2) 録画録音データの保管方法、3) 分析内容の確認、4) 今後の共同研究の方向に関して、まずハレ大学側の授業責任者および授業担当者とディスカッションを通して決定していくことが必要である。その上で、データ収集および（必要に応じて）データ編集、データベースの構築作業を進めていく。すでにハレ大学日本学研究所所長であるオーバーレンダー氏（Prof. Christian Oberländer）ならびに授業担当者のランゲ氏（Frau Anne Lange）との話し合いは進んでいる。

更には、現在学部在籍中の学生に本ダブルディグリープログラムへの入学希望者が出ており、2012年度春季期間中（2月～3月）にはハレ大学においてフィールドワーク研究活動を実施中である。

4. 今後の課題

これまで培ってきたドイツ州立ハレ・ヴィッテンベルク大学との交流は、学部生レベルでの交換授業、フィールドワーク、共同講義科目の運営等とならんで、大学院生のダブルディグリープログラム派遣活動を継続しておこなうことで、今後のより密接な共同研究の基礎がつけられると考える。その場合に、このいわゆるデータ基盤は、外国語関連の講義科目やスキル科目への反映に生かせるだけでなく、SFCの言語学習環境デザイン構築にも、重要な参考データとなりうる。この活動を通して、今後「成長型」のシステムが構築できれば、今後のデータ蓄積がより効率的な形で実現すると考える。さらには、現在ハレ・ヴィッテンベルク大学大学院との間でおこなわれているダブルディグリープログラム（修士）で、政策・メディア研究科から派遣の形で運用されている交流を、今後は大学院生の「受け入れ」が可能となる体制へと移行させていくことが必要となる。その際は、制度も含め

た環境構築をおこなうことになると考えてる。

なお、本課題は、2012年度より発足した「ダブルディグリー・小委員会」内で一委員として報告もおこなっており、SFC内の課題として他の教員・職員の方々と情報を共有している。また、本研究結果の一部は、2012年度のORF（オープンリサーチフォーラム：2012年11月22日～23日、於東京ミッドタウン）の展示発表内で言及した。